

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都市 】

1 実践テーマ	【 III 】
2 実施対象者	京都市立塔南高等学校 第3学年（278名）
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <p>① 教科名（ ）</p> <p>② 行事名（車椅子バスケットボール選手との交流学习）</p> <p>③ その他（ ）</p> <p>(2) 地域における活動</p> <p>① イベント名（ ）</p> <p>② その他（ ）</p>
4 目標 (ねらい)	<p>(1) 障がい者スポーツを通して、障がいを持つ方に対する偏見と誤解を払拭し、個々の可能性を発見するとともに、多様な状況に対応できる「考える力」を育てる。</p> <p>(2) 車椅子体験や交流試合、選手との対話を通じて障がいをもつ方に対する理解を深めるとともに、共生の大切さを学び、また自分の生き方を考える機会とする。</p> <p>(3) 障がいをもつ方が住みやすくなるために、社会はどう変わらなければならないかについて考える機会とする。</p>
5 取組内容	<p>(1) 事前学習</p> <p>① 「オリンピック・パラリンピック教育」に基づく学習テーマと目標の理解</p> <p>② 車椅子バスケットボールの競技概要の学習 教材：日本障がい者スポーツ協会サイト『かんたん！車いすバスケットボールガイド』 <a href="http://www.jsad.or.jp/about/referenceroom_data/competition-guide_05.pdf">http://www.jsad.or.jp/about/referenceroom_data/competition-guide_05.pdf</a></p> <p>③ リオパラリンピックに日本選手団最年少で出場を果たした車椅子バスケットボール選手、鳥海連志さんに関する学習 教材：『めざせ!2020年のパラリンピアン』より 鳥海連志×香西宏昭 (NHK総合, 平成27年10月6日放送)</p> <p>(2) 車椅子バスケットボール選手（6名）との交流学习 講師：坂野 晴男 氏 (日本車椅子バスケット連盟強化指導部副部長, シドニーパラリンピック女子車椅子バスケットボールチームコーチ, KYOTO UPS コーチ)</p>

- ①KYOTO UPS・LAKE SHIGAの選手の模範演技
- ②競技用車椅子での前進・ターン・後進の体験（できる限り全員）
- ③車椅子バスケットボールのゲームの体験（クラス対抗）
- ④車椅子バスケットボール選手の方々との懇談

①



②



③



④



(3) 事後学習

ホームルームで、感想文の抜粋をもとに交流し、振り返りを行う。

6 主な成果

◆ 事後アンケートの結果、以下のような感想や気づきが大多数の生徒のアンケートに見られ、学習のねらいを十分に達成したと認められる。

(1) 偏見や誤解の払拭と個々の可能性の発見

「最初クラス代表の選手に選ばれた時はすごく嫌で、代わってほしかったけど、実際にやってみると、とても楽しくすごく良い経験をしたと思いました。」「最初はあまり興味がなかったけれど、前進・後進の体験をしてから車いすの操作が難しいことがわかりました。とても貴重な体験になったので、今後このような機会があれば、是非参加したいです。」「本当に大変なのに、(両チームの選手の)皆さんはとても明るくて、すごく良い方で、嫌な感じは何も見せなく、むしろ楽しんでいたので、素晴らしいと思いました。私も何でも意欲を持って頑張りたいです。」

(2) 障がいを持つ方への理解と共生社会の大切さの理解

「足が不自由になっても車いすのスポーツという別の道を切り開いて前向きに進もうとする姿に感動しました。」「来ていただいた選手のお話を聞いて、バリアフリーなどの色々な工夫がされていることがわかった。」「障がいのある人を見かけたら、積極的に声をかけ、手助けできるようにしていく。」

(3) 共生社会の構築への意識の向上

「社会で暮らす人たちがみんなが他の人の体の具合等を理解して困っている人たちがいたら、さっとお手伝いできるような社会になればいいと思った。」

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>(1) 運営への生徒参加 希望者を中心に、選手の移動の介助、開・閉会式の進行、車椅子体験の準備やサポート、車椅子バスケのゲーム体験等を生徒の手で行わせた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">花束贈呈 <span style="margin-left: 200px;">生徒代表謝辞</span></p> <p>(2) 車椅子の乗車をできる限り全員に体験してもらう 実際に車椅子に乗ることによって、操作の難しさや腕への負担、不自由さ等を体験的に理解させた。</p> <p>(3) 昨年度の課題であった「事業の事前と事後の、生徒の意識の変化を数値的にとらえるためのアンケート」を実施した。 ※アンケートは筑波大学体育系 宮崎明世先生によるものを使用。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>(1) 人権学習という枠だけではなく、全教科・科目による横断的な形で「オリンピック・パラリンピック教育」の実践をより広く深く展開できればなおよいと考える。</p> <p>(2) 両チームの選手との、いわゆる「ふれあいタイム」の時間をもう少し長めの配分ができれば、生徒の心に響く成果が、よりリアルな形で現れるのではないかと考える。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>共生社会の構築に寄与しようとする意欲や態度を養うため、本事業を継続して実施していきたい。8に挙げた課題について改善を図りながら、2020年東京オリンピック・パラリンピックへの機運醸成の観点をより鮮明にする方向で検討し、次年度も車いすバスケットボールの交流学習を継続する予定。</p>